

序

十五年前、ぼくは、やはり、文学運動の渦中にいた。かれが出現した。かれは十五歳だったが、十八歳だと称していた。かれは髪の毛を刈ったことがなかった。かれは近眼で、ほとんど盲目に近かった。かれはめつたに口をきいたことがなかった。かれが初めて会いにきたとき「ステッキをもつた少年が面会にきています」と取次ぎの者がい

た。……  
というた、ぼくがコクトオで、関根がラディゲみたいたが、かれは、ラディゲのように年齢をいつわるような人間ではなかった。かれは、事実十八歳だった。かれは、きれいに散髪していた。かれは近眼で深なく、視力検査表の一番下の文字を、そくざにいいてることができた。かれはアゴをつきだして誰にでもくつてかかった。かれが初めて会いにきたとき、もしも取次ぎの者がいいたならば、あるいは、関根流に「少年をもつたステッキが面会にきています」といったかも知れない。関根満々のステッキ。デモ用のステッキ。ステッキは、つねに相手をなぎ倒す機会を待っているようにみえた。

かれは、ぼくの友だちになった最初のプロレタリア・インテリゲンチだった。かれは、ぼくらの機関誌「文化組織」に、つぎつぎに詩や小説を発表していった。ステッキは、風をきいて唸り声をたてはじめた。……

戦後も、ぼくらは、やはり、同じ文学運動の渦中にいた。かれは、ぼくらの機関誌「綜合文化」の編集長だった。そうして、かれのステッキを、指揮棒のようにふっていた。したがって、この本にはいつていられるかれの近作は、戦争中のかれの作品ほど派手ではないかも知れないが、——しかも、かれのサティアが、最近、ますます陰にこもって、とどまらされてきたことはたしかである。どうやらかれは、かつてのぼくらの「レジスタンス」のきびしい自己批判の上に立っているようにみえる。……  
一九五三年六月

沙漠の木

沙漠の木

▲根失い穂となってころげ  
風のなかに生きる沙漠の木

海をのんで

脳の微かたどり 化石した鉱滓の陸  
さらに液状の鉱滓

火の舌抜かれつつ散乱し  
陽なく 陽炎もさる

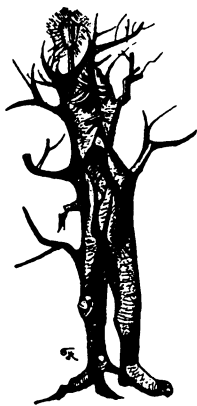
製鉄所裏のそこには  
いつも僕を抜けてた僕がいる

黄いろく風が吹く日  
鎔鉱炉はスフィンクスに変わり  
頭をふるると沙漠の木が走る

花田清輝

樹

血の気の失せたひとびとを  
血の色に染めあげ



炎は  
木を焼き  
樹を焼き  
樹の葉はいっせいに火を吹き  
涙がたつたかと思えた瞬間  
炎のなかに  
動かぬ幹だけが黒かった

あの日——  
火の海と  
海につづく川の波との間に  
砂を噛み  
痛むまなこをみひらいて  
僕は樹のように立ちつくしていた

僕は屋でも樹の間を歩いていると  
突然樹が叫びだすように思えてならない

水害風景

道端で

大利根の堤防を決壊  
桜堤を突き破った  
一つの必然が  
いま、目の前まで来た  
黒い影が  
懐中電燈を照らした道端の勾配を  
小さな波一つ立てず  
響上ってきた

虫の音は途絶え  
曇はすでに水中にある  
田の蛙の鳴声もやんだ  
月のない晩  
僕は僕の恐怖でなく  
彼らの恐怖をしまった

庭

はじめ馬の小便のようなのが  
ひとすじ流れこんできた  
つづいてふたすじみすじ  
たちまちひとつに合体して池  
避けようとした瞬間の動作も冷笑された  
荷物をもった僕は下駄ぬらし踵ぬらし  
そのときチロチロ流れる水の音をきいた

上陸用舟艇

あの舟には見覚えがある  
戦争のとき船橋の工場でみた  
上陸用折疊舟  
御料林の櫓をベニヤ板にして作ってある

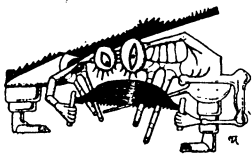
かなしい兵器が  
かなしいときに役立つものだ

徒歩連絡

十数本の構内引込線レールの上に散開した自らなる秩序。朝晩、電車で馴染みの衣裳の前進だが、こんなに沢山のひとびとを、こんなに美しいひとびとを、僕がかつてみたことがないような気がする。どつと溢れ、絡繹としてつづいている。一分間百十四歩。いや、もっと早い群集の流れだ。僕が最初に道端でみた水の流

樹木鋸盤

一端を道路の並木に  
一端を手製の三又に  
しばりつけた鉄のパイプを挟み  
猫背の老人が二人  
向き合って鋸をひいている  
シンカー シンカー  
シンカー シンカー  
ちよつと手を休めると  
ボロ片から切削油をふりかける  
シンカー シンカー  
シンカー シンカー



道端のリヤカーの上に  
まだ手をつけてないパイプが十二三本あった  
原始社会の樹木旋盤が廻えり  
二人の老人はみるみる小さくなり  
頭のなかに位置をしめるに至った  
彼らは腐った脳味噌も  
引くのであろうか

卓上旋盤

古道具屋の店先に  
卓上旋盤が立っている  
筆筒や椅子や机や火鉢は  
閉切ったガラス戸の中  
蔵い残され 朝の雨に濡れてる  
焼トタンを頭から冠せられ

海

水はきつと冷めたいにちがいない  
僕はまだ冬服をきているのに  
日本人の子供が泳いでいる  
波が荒いのには  
パンパンガールが外国の船のいる方へ  
ボートを漕いで行く

——きみ  
レールモントフのタマーニを思い出さない？  
啞の子供と密輸入者とその恋人の物語……  
街へ帰ろう！  
元気がでたようだ

水族館

パスの発着所で  
赤い魚が檻に入っている案内図をみた  
——木立のなか



青いペンキの剥落した建物が  
海に面して建っている

海の底の断面に顔をよせると  
水に濡れた光をうけた  
僕の洋服の胸を

魚の群が泳ぎ

水のなかにいるようなきがした

片明りの廊下の秘密であった

僕の影が水に映らず

むこうの影が僕に映ったのは

編隊でとんでいる飛行機  
潜水艦のテレスコープ  
それは装甲戦車にみえた  
日本名ほうぼう  
異名(海の駒鳥)



殺伐な兵器の遺構はさか  
底にうすくまっていたが  
枝から枝へ  
飛びそうだ  
まさに  
海の駒鳥!

水の世界を眺めている  
暗い世界では  
魚のように冷めたい柔らかい手が  
僕の手にあれていた  
硬くない、  
二つのいろのあいだにいて  
滲透庄  
そんな言葉をおもいだした

実験

霧

この国の汽車は  
霧のなかを走る  
この国の汽船は

霧の波止場から出発する

この国の飛行機は

霧の飛行場を滑走する

俺は霧のなかで

五年間暮した

俺は霧のなかを

五年間旅行した

俺は霧に悩み

霧を憎悪し

太平洋から押寄せてくる寒波と

俺の

いや俺達の

なまあたたか体温が

霧の原因であることを発見した

俺が体温を捨て

水になると

突然

北から

霧がはれた

なんでも一番

寒い!

こいつはまったくくだらない

せつかくきたのに

摩天楼もみえぬ

なにがなんだか五里霧中

その管!

アメリカはなんでも一番

霧もロンドンより深い

嘘だと思っ?

職業安定所へ

行って

試してみろ!

紐育では

霧を

シャベルで

運んでいる!



鼠の詩

白い雲 悠々とんでる 島の上

睡たいエンジン ひびかせて

旋回はじめる 飛行機一機

翼を染めた 異国のマーク

パラシュート 小包さげて急降下

破裂した火花の白いけむりのよう

手に手に棍棒 空と地上を

睨みつけ 集っている村の人

まもなくはじまる 揃みあい

飛びだしてきた鼠 二十四以上

もうそのときは 救援物資配達任務終え

飛行機 沖へまっしぐら

艦が三尺 尻尾が二尺

世に珍らしき大鼠

小包めがけて 一斉攻撃

棍棒ふって とられまいとする村の人

とうとう鼠は 警戒突破

ちよろりと尻尾に 小包まきつけ

すばやく地下にもぐりこむ

もぐらのあけた穴ではない!

棍棒捨てて 村の人

水陸両棲 変化自在

踏みぬく天井 穴あける壁

追えば五分で 十里を走る!

箸にも棒にも かからぬ大鼠

彼らはずい遠征する

自由を求めて 海を越えて

台湾へ! 台湾へ!

絵の宿題

魚は誰のもの。

私、と魚が云いました。

ところが

漁師が魚をつかまえた。

ここに描いて下さい。

魚をつかまえた漁師の絵を。



仲間同志で 喚くやら 喚くやら  
《盗難品小包三個 犯人鼠》

政府に報告書 書きあいた役場の書記  
村の議会動かし 鼠撲滅費三百万円  
通過させた揚句 この結果  
おさまらず いきとおる村の代表者

弾圧すれば 二倍三倍になる反撃  
実らぬうちに 喰い荒される島の作物  
米も麦も倉庫は空っぽ  
土蔵の積も 三日ともたない……

いまに人間喰うかもしれない  
再度論議される 毒ガス使用許可申請  
《毒ガスは鼠より人間殺す》  
許可を躊躇する 本国政府

鼠の道路は 地下とドブ  
漁師は誰のもの。  
私、と漁師が云いました。  
ところが  
鑑札を役人がとりあげた。  
ここに描いて下さい。  
鑑札をとりあげた役人を。



役人は誰のもの。  
私、と役人が云いました。  
ところが  
ワンマンが役人を首にした。  
ここに描いて下さい。  
首を切ったワンマンを。



ワンマンは誰のもの。  
私、とワンマンが云いました。  
ところが  
兵隊にワンマンは護られていた。  
ここに描いて下さい。  
ワンマンを護っている兵隊を。



兵隊は誰のもの。  
私、と兵隊が云いました。

兵隊は給料を貰っていた。

ここに描いて下さい。

給料は誰のもの。

私、と給料が云いました。

ところが

給料はゼイキンが払っていた。

ここに描いて下さい。

ゼイキンが払った給料を。

ゼイキンは誰のもの。

私、とゼイキンが云いました。

ところが

ゼイキンはボク達が払っていた。

ここに描いて下さい。

ゼイキンを払っているボク達を。

ボク達は誰のもの。

ボク達とボク達は答えよう。

世界はボク達のもの。

ボク達がボク達のものになるとき。

ここに描いて下さい。

ほんとうのボク達の姿を。

### 燃えている家

燃えている家

それは 外国へ輸出する  
船を造っている工場だ

燃えている家

それは 外国へ輸出する  
ミシンを作っている工場だ

燃えている家

それは 染料から火薬の生産へ  
逆もどりの工場だ

燃えている家

それは 火薬を積載する  
器械を作っている工場だ

燃えている家

それは、ドルの国の原料に  
頼っている鉄の工場だ

燃えている家

それは、ポンドの国の原料に  
頼っている繊維の工場だ

燃えている家

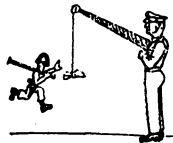
それは、米の代金を抑えられ  
ミシンも買えぬ家計の農家だ

燃えている家

それは、米屋の払いに追跡され  
炭炉も燃えぬ労働者の家だ

燃えている家

それは、日本の町の隅々にある  
日にみえない力の工場だ



燃えている家

それは 磨滅に絶望をたてつつける  
工場でない俺の工場だ!

### 靴の歌

靴に車をつけたのだ――

電車も

自動車も

靴に轆かれたり

靴の下に飛込むひとがいるわけだ。

飛行機は

靴に羽が生えたのだ。

靴の下で爆死したひとがいるわけだ。

足を疲らせないためのもの

長く旅行できるためのもの

足を美しくみせるためのもの

それが俺達の靴ではなかったか?

俺達は靴と靴の間を横切らねばならず

靴の下を歩かねばならぬ。

だが俺達は――

靴の上を歩かねばならぬ。

諸君の靴が破れているなら

それは誠実に生きた証拠だ。

諸君の靴に

車も羽もついてなければ

それは安全規則を守っているためだ。

疲れている靴は休ませねばならぬ。

諸君の靴に花を飾ろう!

スタッキングが死んだときのよう

靴みがきのところへ行く代りに

車をつけ

羽を生やそう!

俺達の宮殿へ行くために。

### 詩集△死んだ鼠▽から

死んだネズミ

生まれだての赤ん坊は

目があかない

それでも

赤ん坊は赤ん坊

死んだネズミは

目をさまさない

それでも

ネズミはまだネズミ

赤い魚と白い魚

青い海の

赤いお魚

赤いお皿でむかえましょ

赤いお魚ばかりなら

赤いお皿はこわしましょ

青い海の

白いお魚

赤いお皿でむかえましょ

赤いお魚ばかりなら

赤いお皿はこわしましょ

でもわかんない

どっちがくるか

赤い魚か白い魚か

海にきいてもわかんない

海のへんじはただ青い

豆の木

豆の木

生えよ

生えぬと

ちよんぎるぞ

豆の木

伸びよ

伸びぬと

ちよんぎるぞ

豆の木

伸びろよ

伸びろ

いそいで

豆の木

とどけよ

とどけ

天まで

豆の木

豆の木

かわいそ

やせこけ

ひよろひよろ

ゴミ箱の火事

夜なかみんなが

眠っているとき

きこえてくる

黒いゴミ箱のなかの声

忘れちゃイヤだよ  
目がつぶれても  
ぼくはまだ人形だよ  
かけらになっても  
ぼくはまだ鏡だよ

実体のないマッチの空き箱  
泡ときえたシャボンの包  
タネを残したリンゴ  
胃を残した魚  
目がつぶれた人形  
かけらの鏡

目下は同居  
野良犬が  
片輪の人形を  
オモチャにする……

クズ拾いが  
こわれた鏡から  
信じられない発明をする  
(要するに  
クズがホントのクズになるのは  
もいちどなにかの役に  
立ってからです)  
一九XX年  
しかし

ゴミ箱に火をつけてまわる男がいる  
雨はなく  
いつ大火事になるかもしれない

忘れちゃイヤだよ  
目がつぶれても  
ぼくはまだ人形だよ  
かけらになっても  
ぼくはまだ鏡だよ

夜なかみんなが  
眠っているとき  
きこえてくる  
黒いゴミ箱のなかの唄

ジャズ・メッセンジャーズ風のブルース

アドバルーンの手で  
顔を撫でられて  
あたしを買ってヨ  
エスカレーターに乗せて  
天国まで……  
夜も星も地の底に  
爪のほす  
恋の地下鉄  
内臓に口紅  
デンデンデンデンデン  
ダダダダダダ  
星はみえない青い火花の奥深く

眠る美女と野獣

見よ  
ブラカード  
遠州森の石松

車人車人車人車車車車  
横切る

本日の交通事故  
火災通知のない火事が走ってゆく  
火事はどこだ?  
お前の頭のなかだ!

俺は飽きたヨ

新宿の町  
イヤな町  
うるさい町  
汚ない町

夜の天使が

翼をひろげ

遊ぼうヨ

パタパタ

金ないヨ

パタパタ

俺は飽きたヨ

新宿の町

ケチな町

くだらない町

悲しい町

夜の男が

翼をひろげ

遊ぼうよ

パタパタ

バカヤロー

パタパタ

吐きだして

吸いこんで

鍵戸を閉ざしても

眠れないのヨ あたし

買ってちょうだい! ねえ

あなた

お前なんか買えるもんか!

ネオンの骸骨を抱いて

踊りやめない酔いどれ

夜がこないうちに朝がくる

ハイ 朝刊!

新聞のなかから

アドバルーンが昇ってゆく

空高く

主題歌

今日

わたしの心に重く飛沫をかけるもの

ききなれた主題歌

しつように繰返す

単調のリズム

新譜はありませんか

ケネディの主題歌はどうです

飽きました

ではフルシチヨフでは

ああマンボ・ガガーリンです

シェバード中佐もあります

主題歌は

通りすがりに世界を引裂く

黒いの

黄いろいの

赤や青

非原色

いりみだれて

頭にカビの生えた主題歌のない

世界はないか

ごぞんじですか

キニーパでは

革命はあったが

まだ時はないという話です

約束したひと

行きつ

戻りつ

帰りつ

立ち去りかねて待っているひと

空をみつめて心をつめて

うたがあつてうたがない

待っているひと

ときの流れは砂の目盛り

無数ではみたされない

盃のくるしみ

駅は船

みえない朝からくるひとを

ひとり降ろす

砂を噛み

貝に唇を閉じ

夢に夢をかきわて

さらさらの世界のなかで

行こうか

帰ろうか

待とうか

約束したひと

秋山清らの「コスモス」の創刊は、昭和二十一年（一九四六）であり、向井孝らの「IOM」の創刊は、昭和二十二年（一九四七）である。

戦後における民主主義的な詩運動は、もともと強力に、これらの雑誌によって推進された。しかし「コスモス」は戦争責任の問題を正当に取あげながら、同陣営内の責任の相互検討をなしくずしにすることで、この問題を中途で横流しにせざるを得なくなり、戦前のプロレタリア詩運動と、戦争期の挫折の問題と、戦後の出発との継ぎ目を明瞭にすることに成功せず、金子光晴を除いては、戦前派の単なる出発という印象をおおいがたく与えた。向井孝らの「IOM」同盟の運動は、その主観的なリアリズムの描写が、詩の方法上の問題では、プロレタリア詩運動の時代から何ほどの進展のあとも示さなかったといえるが、正当な評価さえうけることなく、熱烈に持続的に展開された。

民主主義詩運動の戦後派は、関根弘、木島始、瀬木慎一らの「列島」グループの出現によって、はじめて明確な形をとりはじめた。

「列島」の創刊は、昭和二十七年（一九五二）であり、ここには、野間宏、長谷川龍生、井手則雄、安東次男などを含めて、民主主義陣営の新世代の詩人はほとんど結集した。

しかし、このグループが、真に方法的な自覚の上に立って方向を決定したのは、関根弘が「新日本文学」一九五四年三月号に「狼が来た」を発表して、民主主義詩運動の方法的な無自覚と、それと共通な根柢につながる運動上の欠陥、政治的なタイハイの根源を鋭くついで、野間宏、岡本潤、その他「詩運動」の一派と激しい論争をくりひろげてからであった。

この論争を契機として、関根弘らは、はつきりとアヴァンギャルドとリアリズムとの統一という方法上の立場を打ち出し、プロレタリア詩運動の内在的な欠陥を、この方向に克服すべき方針を立てた。

「列島」昭和二十九年（一九五四）七月号は、「日本プロレタリア詩の歩んだ道」という特集を行って、アヴァンギャルドとリアリズムの統一の立場から、過去のプロレタリア詩を再評価したが、そこに掲載された瀬木慎一の「アヴァンギャルドとリアリズム」という評論は、戦後民主主義詩運動のなかで特異な意義をもつ力作であった。瀬木は「赤と黒」の運動のような、詩運動として論ずるに耐えない貧弱な運動を、真正面から嫌わず取りあげ、それを拡大、再評価することによって、アヴァンギャルドの系譜を追究した。このような貧弱な詩運動を再評価せねばならないところに、戦後のアヴァンギャルド世代の同情すべき負目があるをえなかつたといえるであろう。

「荒地」グループが戦後、自我主体と現実との接触する体験と態度と意味を重んじ、そこに詩の表現の領域を拡大してみせたのに対し、「列島」グループは、自我主体を意識化することによって、情緒的な屈曲を克服する方向に、戦前の現代詩の特徴的な欠陥を克服しようとして試みた。「列島」グループの生んだ代表的な作品といえは関根弘「霧」「なんでも一番」「絵の宿題」、長谷川龍生「理髪店にて」「特許局にて」「パウロウの鶴」「新テロリスト」、木島始「恋歌」などを挙げられるであろう。たとえば、関根弘の「なんでも一番」は、

妻い！  
こいつはまったくたまらない  
せっかくきたのに

魔天按もみえぬ  
なにがなんだか五里霧中  
その答！

アメリカはなんでも一番  
霧もロンドンより深い  
嘘だと思おう？  
職業安定所へ  
行って  
試してみろ！  
紐育では  
霧を  
シャベルで  
運んでいる！

この最後の「紐育では 霧を シャベルで 運んでいる！」というような表現を考えてみると、霧というものを物質として捉えながら、寓喩として同時に成立させ、それをシャベルで運ぶというような表現角度でとりあげるといえることは、一見、何でもないうででありながら、戦前のプロレタリア詩運動の実作では思いも及ばないことであることが判る。

ここには、新しい視角からする日本現代詩の新しい表現領域の可能性が垣間見られる。関根弘の詩は、大部分、失敗作であるが、この表現の摸索が実を結んだ時を考えるのは嬉しい。長谷川もまた、小野十三郎の自然主義的リアリズムの影響下に出発しながら、小野が切り拓いたリアリズムの領域をいちじるしく拡大した。浜田知章、長谷川龍生、井上俊夫等は、大阪で「山河」を刊行して、「列島」グループに呼応して、社会主義リアリズムの確立を目指し、実験的な運動を行っていた。

「荒地」グループといい、「列島」グループといい、いわば戦争の体験の意味を、内部から検討することによって、戦後の詩的な出発をはじめた。これらの詩人たちは、どのような主題を選んで、戦前の現代詩の欠陥をどう克服するか、戦争体験と戦後現実とをどう受けとめて出発するかという課題を、たえず引ずって来ざるを得ない世代であるといえることが出来る。

さて、関根弘詩集「約束したひと」の詩の世界は奇妙なところで成立している。そこには、関根弘の「生活圏」における心情はあるが、論理がないのだ。「絵の宿題」以後のこの詩人の展開を知るものにとつて、「約束したひと」に露出した日常的な感性の世界とことばの秩序は、突然変異的な驚きを与える。

ぼくは  
あなたなんでもあげます  
声もあげます  
舌を切つて  
さしあげます  
声がなくとも  
目で話せます

俺は飽きた日

新宿の町

イヤな町

うるさい町

汚ない町

夜の天使が

翼をひろげ

遊ぼうよ

バタバタ

金ないよ

「ジャズ・メッセンジャーズ風のブルース」

カクケツコン

サシセンソー

一人ハ二人ヲモトメ

二人ハ一人ヲモトメ

孤独ニ耐エラレナイ

ニンゲンノ孤独!

「ケツコン行進曲」

ここに流れている心情は吉野弘が言った「プロバガンディストの孤独」(「関根弘をダシに使つてのひとくさり」というものであろうか。更に続けて吉野は「プロバガンダとは、淋しいものである。人を安易に煽動しようというのではなく、ほんとうに深く強い意味の連帯を求めて、そうするのであつても、やはり淋しいものである」といつているのだが、しかし、その淋しさとか孤独というのは、詩が詩の形をとる前に、詩の不可能性として、詩人の体質に粘着しているものではないのか。

詩人が詩を書くという事は、孤独であればあるほど、孤独でないところへ、つまり、心情の世界から、論理やイメージの世界へ飛び立つことであり、プロバガンディストが、生活心情で、淋しがつていようがいまいが、その次元から自立した世界がつくり出されなければならぬはずである。

いったい、こういう詩の世界は、この詩人にとって突然変異的であつたのだろうか。ぼくは処女詩集「絵の宿題」のなかに、すでに潜在的に、この問題は負荷されていたように思われてならない。つまり、二つの主要な極のひきあう力によって緊張した世界である。たとえば「樹」というの復帰という、二つの主要な極のひきあう力によって緊張した世界である。たとえば「樹」という詩は「僕は星でも樹の間を歩いていこうと突然樹が叫び出すように思えてならない」という、すばらしい隠喩の魅力をたたえた詩の世界である。そこでは、戦後の生活過程の中で突然よみがえつた戦火の恐怖が、感覚的な追体験として実感されている。それは、たとえば「水害風景」という詩において、水害のなかで、上陸用舟艇が役に立っている事象をみて、「かなしい兵器が、かなしいとき役に立つものだ」とこともなげに戦争の記憶がよみがえり、また忘れられていく日常感覚とも符号するのである。関根にとつて、戦争体験への下降は、そこに思想的な意味をもとうとするのではなく、あくまで、感覚の領域に属していた。鮎川信夫らの「荒地」の詩人たちが、戦争体験を、一つの思想的原質にまで主体化することによって、戦後の現実状況と対応する内部の混沌とした世界に、想像力の意味と方向を与えようとしたのと比べれば、そこには、よほど大きな相違があるのである。そして、この戦争体験の下降の意識は、「絵の宿題」をもう一方の極で牽引している戦後日常世界への復帰の意識のなかへうすめられていくのである。たとえば「海」という詩には、まだ冷たい早春の海で泳いでいる子供、パンパンガールが外国船「ポート」を漕いでいく、そういつた世界が、レールモントフのタマーニとの連想のもとに、驚くほど明るく、新鮮な感覚でうたわわてい

る。それは決して占領下日本に対するうつつ屈した意識でなく、むしろ、戦後の新しい生活に対する肯定的な意欲である。この「樹」が示す戦争体験がよみがえらず恐怖の意識から、「海」が示す戦後日常世界に対する復帰の意識までの関根の内部構造を特色づけているものが、その後の関根の詩的な展開を内側から規定していくことになったのだ。それをひとくちでいえば、大衆的な生活者の上昇的な戦後意識に密着したところでの、新たな詩表現の領土の獲得だったのである。しかし、そこにおける困難な問題は、関根が、生活者の上昇的な感覚の領域を詩表現として成立させようとするとき、同時に、内部志向として、反「生活圏」的な下降力ともいうべきものが、どのくらい強く働いていたかということである。詩の可能性は同時に、詩の不可能性の宇宙を、いかに重く内部にかかえこんでいるかによって、そのリアリティの濃度を決定する。関根弘が戦後の出発において持った詩的世界のリアリティは、生活過程への復帰という上昇力と、戦争体験への感覚的下降とが、それぞれ牽引しあう緊張した意識のなかに、みずからことばを発見していったところにある。しかし、その後、戦争体験への下降があくまで、感覚的な反応にとどまっていた、論理力として徹底されないうままに稀薄化していき、更に、戦後革命の敗退による大衆社会的な状況が生み出されるなかで、上昇的感覚そのものの根底的な基盤が崩壊されてくると、関根の詩の世界は、詩としての自立性を失つた日常の秩序的な秩序やことばが、無抵抗なままに露出してくるのである。そこには「約束したひと」の幾つかの詩篇をみることになる。

しかし、ぼくはこの詩集については、比較的すぐれた詩についても論じなければならぬだろう。関根弘の詩の問題は、つまらない詩にもすぐれた詩にも共通して存在しているから。この詩集中、もっともすぐれた詩は「革命はインクのなかで」と「約束したひと」であろう。「革命はインクのなかで」が新鮮な感動を呼ぶのは、キューバ革命というような、意識が類型化されがちな素材を、あくまで、生活の内側の意識に密着させてとらえているからである。

シェラ・マストロ山に

たてこもつた

キューバの忠治

国定忠治

あなたは

あなたは

あなたは

あなたは

あなたは

あなたは

あなたは

あなたは

あなたは

あなたは

あなたは

あなたは

あなたは

あなたは

あなたは

あなたは

あなたは

あなたは

あなたは

あなたは

が、この詩集中におけるもつともすぐれた陽面であるとすれば、その陰面には、「約束したひと」という作品を見出すことができるであろう。

行きつ

戻りつ

掃りつ

立ち去りかねて待っているひと

空をみつめて 心をみつめて

うたがあつてうたがない

待っているひと

ときの流れは砂の目盛り

無数ではみだされぬ

盃のくるしみ

駅は船

みえない朝からくるひとを

ひとり降ろす……

この詩で、「空をみつめて／心をみつめて」という二行に噴出しそうな「淋しさ」は、しかし、全体的に単純化されたことばの構成のなかで強く抑制されている。「ときの流れは砂の目盛り／無数ではみだされぬ盃のくるしみ」というクラシックな詩句によって、この詩人は何を待とうとしているのであろうか。「みえない朝」ということばがわざわざ象徴しているものは、革命から恋人までの待ちつつ来ない「約束したひと」なのであろうか。この詩はことばの単純化による緊密な構想が、そのまま、詩の空間を拡大しているかのように見える例として、この詩集中、失敗していない唯一のものである。

しかし、この詩集をすぐれて代表しているこの二つの詩は、また、この詩集のはらんでいる問題性をも集中してあらわしている。「革命はインクのみ」 という詩の中に、「あなたの声はわれわれに教えた／もともと革命は滅るもんじゃない／するかしんかは決意のもんだいだ」という詩行がある。生彩のある生活感覚がこの詩人の身上であると、ぼくは思うが、しかし、その生活感覚が「するかしんかは決意のもんだいだ」という非論理的な詩行のなかに収斂されていっているのを見ると、それが、この詩人の詩意識の構造を本質的に規定しているように思えてくる。キューバ革命はキューバ革命が背負っている反革命の重さでしか、ぼくらの革命の映像のなかに入ってこないし、キューバ革命がみずからを守るために既存の社会主義圏との癒着を深めていくなかで起っている革命の変質に対する危機感のなかでしか、ぼくらはキューバとの連帯の問題を正しく位置づけ得ない。そして、それに対応するぼくらの革命が、「決意のもんだい」の中で、いかに無惨に扼殺されてきたかということに考えを及ぼすとき、ぼくらは、関根弘の想像力を暗部において腐蝕しているものが何であるかについて、次第に鮮明にすることができるのである。この詩人の想像意識のなかでは、まさにそこから、詩における論理とは何か、詩における思想性とは何かという問いが発せられなければならないとき、心情の彼方に流されていってしまうものがあるのである。それは「約束したひと」を待つ、という意識の内側にある「盃のくるしみ」という、異様に古めかしい美的心情の中に、論理が見失われているのを見ると、いっそうはつきりするはずである。